

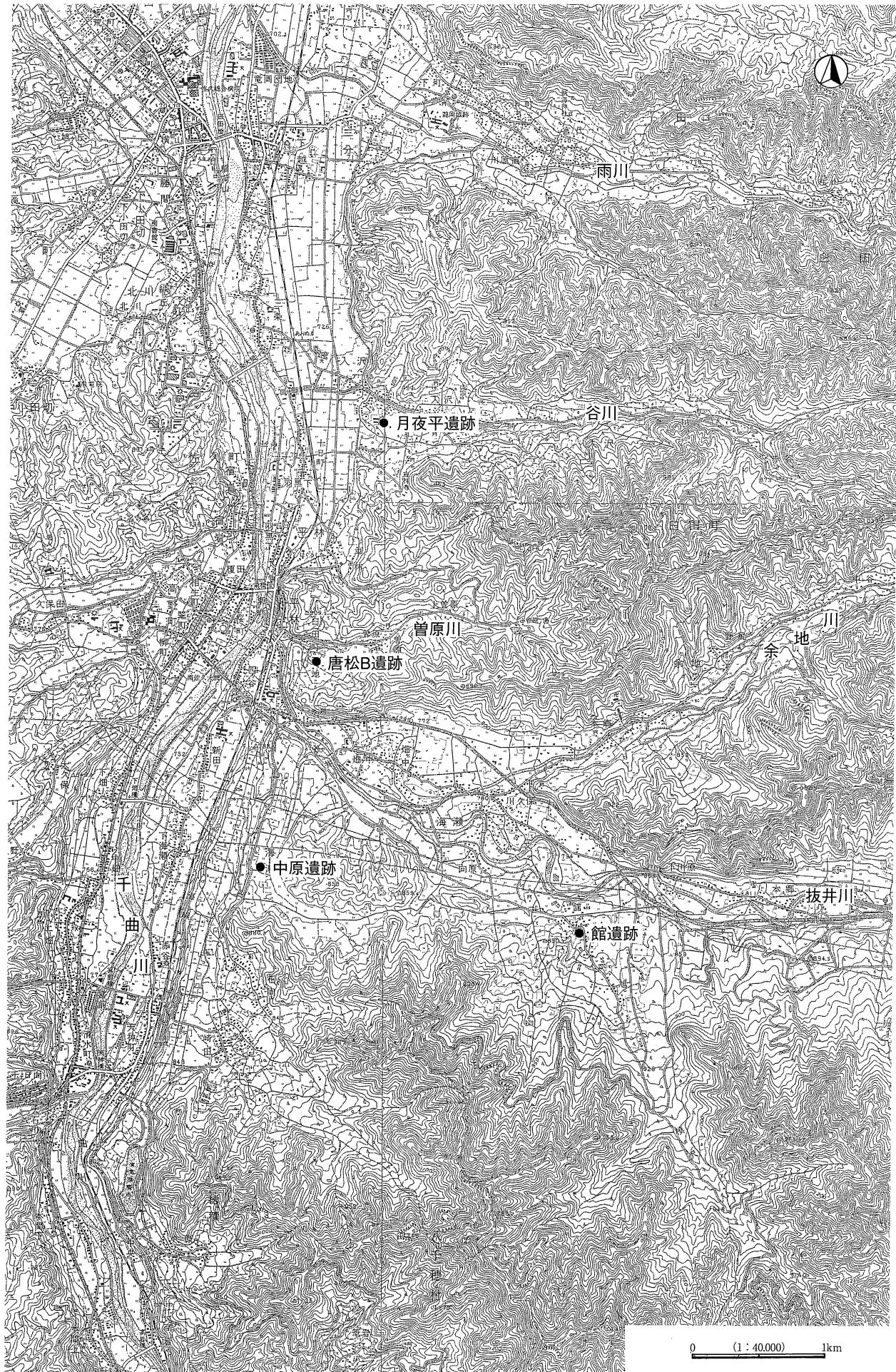
第3節 弥生時代前期末～中期初頭の土器について

唐松B遺跡の調査では、SK01とSK02から条痕文を施文した弥生中期初頭の土器が出土した。SK02出土の壺は、耕作などによる削平で口縁部から肩部まで残存したに過ぎず、壺内には骨が入っていなかったものの、出土状態から逆位に埋納された再葬墓と理解できる。掘り込みは耕作土を含む攪乱により3方向が削平を受けており形状の詳細は不明であるが、残存状況からほぼ円形を呈する墓坑であったものと考えられる。壺は底部付近に埋納されている。SK01は当該期の甕の出土から再葬墓と考えられるが、破片のため埋葬方法は不明である。

南佐久郡で前期末～中期初頭の壺もしくは甕が確認されている遺跡として、南牧村矢出川南遺跡、月夜平遺跡、館遺跡、中原遺跡がある（第39図）。谷川左岸の段丘上にある月夜平遺跡では、胴部に条痕文を施文した壺とミニチュア土器が出土している。また、抜井川左岸の河岸段丘上に所在する館遺跡では、横方向に条痕文を施文した甕や、胴部上半に3本単位の縦区画文を描き胴部中央に工字文を施文した壺、条痕文を施文した土器片が出土している。さらに、千曲川右岸の段丘上に所在する中原遺跡では、胴部に横方向と縦方向に条痕文を施文した壺や胴下半部に条痕文を施文した壺が出土しており、壺の内部に骨が埋納されていたことが確認されている（第39図）。これらの遺物は工事中もしくは耕作中に発見されたものであり、掘り方の有無や埋納方法が不明であるが、唐松B遺跡の事例から、これらの土器は再葬墓に用いられて土坑状の掘り込みに埋納されていたものと考えられる。



第39図 南佐久郡出土の弥生前期末～中期初頭の土器



第40図 弥生前期末～中期初頭の土器出土遺跡

これらの遺跡の位置を図示したのが第40図で、南牧村矢出川南遺跡1例を除くと、千曲川右岸の谷川流域から抜井川流域の範囲にまとまることがわかる。これらの遺跡は千曲川などの河川を望む段丘上に立地する点で共通しており、再葬墓は各遺跡とも群集する様相を示さず、数基単位の小規模な墓域が形成されていると推測される。管見の範囲では、佐久盆地で再葬墓に比定される当該期の土器は確認されていない。土器を伴わない再葬墓の存在も考慮する必要もあるが、本遺跡を中心とした一定の範囲に弥生前期末～中期初頭の壺もしくは甕が分布することは、これらの分布圏が、再葬墓を造営した集団が唐松B遺跡を含む一帯を居住空間としていたことを示すものと推測される。

参考文献

石川日出志2004「再葬墓研究の現在と今後の課題」『考古学ジャーナル』524号

佐久町教育委員会1995『佐久町の文化財』

長野県南佐久郡白田町教育委員会1999『月夜平遺跡』

長野県南佐久郡誌刊行会1998『南佐久郡誌』考古編



雨が降る中での遺跡説明会